

Fellowship's Miscellany

News and Reports

< Conference Report >

2016 年度ディケンズ・フェロウシップ国際学会報告 Dickens Fellowship Annual Conference Aberdeen 2016 (20-25 July 2016)

(報告) 矢次 綾

Aya YATSUGI

2016年のディケンズ・フェロウシップ国際学会は、7月20日から25日にかけてアバディーン大学で開催された。1495年創設のアバディーン大学は、聖マハー大聖堂を中心としたオールド・アバディーンと呼ばれる地区にある。ほとんどの参加者が、赴きのある石畳のキャンパス内の宿舎に滞在して寝食を共にしながら、ディケンズ尽くし、スコットランド尽くし、そして、ポール・シュリッケ先生やアバディーン支部の方々の心尽くしの6日間を堪能した。もっとも、私にとっては初めてのフェロウシップ国際学会参加であり、初日に受付に向かうときはかなり緊張していた。が、アバディーン支部のみなさまの笑顔に迎えられて緊張がほぐれ、楽しく過ごしているうちに、気付くと学会は終了していた。日本からは梅宮創造先生も参加なさっていた。学会の様子を記す写真は梅宮先生が撮影なさったものである。

第一日目の行事は、大学ホールでの晩餐会だった。バグパイプの演奏と、キルト姿のシュリッケ先生に向かえられ、和やかな雰囲気の中で会は始まった。シュリッケ先生は学会中、キルト姿で通され、学会終了後に普段の服装に戻られたときに違和感を覚えるほど、お似合いだった。アバディーン大学のサー・イアン・ダイヤモンド副総長による挨拶と、ケヴィン・マクマホン氏によるマジックも行われた。

第二日目の午前中は、トニー・ウィリアムズ会長の司会で、ジョン・ドリュー氏 (“Dickens and Satire: the Wits' Miscellany”), リリアン・ネイダー氏 (“A sickly

mask of mirth: Conviviality, Care, Belligerence”), クリスティーン・コートン氏 (“The Dickens Guide to Domestic Harmony”) による講演を拝聴した。どの講演でも “conviviality” がキーワード的に使用される中、ネイダー氏が論じた『二都物語』や『ピクニック・クラブ』における “conviviality” の暗い側面が、私には特に興味深かった。その後、キャンパス内でのピクニック・ランチを挟み、午後は大学図書館で開催中のディケンズ展 “An Audience with Charles Dickens: Writer, Performer, Celebrity” を見学した。これは、図書館所蔵のディケンズ作品の初版と、ディケンズによる 2 回のアバディーン訪問 (1858 年と 1866 年) に焦点を当てながら、小説家、公開朗読家、時の名士としてのディケンズ像を浮き彫りにするものである。なお、ディケンズは 1849 年に、アバディーン大学マリスカル・カレッジ学長に立候補するよう要請されているが、辞退している。

この日の夕方は大学を離れ、アバディーン中心部のレストラン (1906 Restaurant) で夕食をいただいた後、レストランにほど近いベルモント・シネマに移動して、マイケル・ステイール氏の短編映画 “Novel Performances by Dickens” と、クロンプトン・マッケンジー氏による同名の小説 (1947) を基にした長編映画 *Whisky Galore* (1949) を鑑賞した。短編はディケンズの公開朗読とアバディーン訪問に関するもので、ステイール氏自身が紹介役を務めた。長編は、マッケンジー氏がフェロウシップ会長だった 1943 年に時代設定され、スコットランドの架空の島を舞台に、供給が止まってしまったウイスキーを獲得しようと奮闘する男たちの姿をユーモラスに描いたもので、紹介役はフェロウシップの元会長のグレアム・スミス氏が務めた。

3 日目は、ホスピタルフィールドとウイスキー蒸留所 (Fettercairn Distillery) を見学した。1260 年に建設されたベネディクト派の修道院付属の慈善施設に端を発するホスピタルフィールドでは、ディケンズからの書簡が近年発見され、マイケル・スレイター先生がその調査に携わられた。それに関するスレイター先生の講演も当館で行われた。夕食は大学ホールでいただいた。その後の余興は、もとイギリス海軍司令官のジム・スミス氏による、ロバート・バーンズの物語詩 “Tam O’Shanter” の実演、そして、ロジャー・ウィリアムズ氏、ドリュエ・トゥロック氏、キャサリン・ウィリアム氏のピアノと歌による 19 世紀の音楽だった。スミス氏のパフォーマンスは私には聞き取りがかなり難しかったが、氏のリズムカルな語り口と、小道具を巧みに用いながら会場を縦横に動き回る力演は十分に楽しめた。音楽は、日本では「蛍の光」として知られているスコットランド民謡の変奏が特に素晴らしかった。この日のメは “Rule Britannia” で、クリスティーン・コートン氏に促され、私もリズムに合わせて赤い布を振りつつ合唱に加わった。



写真 1



写真 2

4日目は、まず AGM が行われた (写真 1, 写真 2)。フェロウシップ運営に関する報告等の他に、25 年間に渡って *The Dickensian* の編集長を務めているマルコム・アンドリュース先生への感謝のウィスキー贈呈や、2017 年、2018 年、各々のフェロウシップ国際学会開催が予定されているイタリアのカッターラ、そして、シドニーの代表者による準備状況報告もなされた。休憩を挟んで、ミュージック・ホールが人気を博する以前に存在していた、歌と食事を楽しむクラブについてのシュリッケ先生の講演 “Glorious Apollers and Ancient Buffaloes” が行われた。昼食後は、推理小説家イアン・ランキン氏とラジオ・パーソナリティーのジェームス・ノーティー氏の対談、書誌学者としての経験が遺憾なく発揮されたジェレミー・パロット氏による講演 “Dickens and Company: the contributors to *All the Year Round*”, ヨーク大学大学院生のエミリー・パウルス氏とアバディーン大学大学院生のアレク・スチュワート氏、各々の博士論文に関する発表という盛沢山のプログラムが続いた。夕方は、アバディーンが目抜き通りユニオン・ストリートにあるタウン・ハウスで、トニー・ウィリアムズ会長の司会による晩餐会が行われた。ジム・ノーティー氏がディケンズの不朽の名声について語った後に、ゴードン・ヘイ氏がスコットランド訛りのサム・ウェラーを演じた。これはやはり私には聞き取りが困難だったが、それでも、ヘイ氏の力演ぶりは一見 (一聴?) の価値あるものだったと思う。

日曜日にあたる 5 日目は、アバディーン大学、キングス・カレッジ・チャペルのツアーと、同チャペルでの礼拝に始まった。午後は、16 世紀から 17 世紀にかけてフレイザー家の居城として建設された城を見学した。美しい調度品が並ぶ中に鎮座した古いピアノの音色の柔らかさが、私には特に印象的だった。夕方は大学ホールで学会最後の晩餐会が開催された。オハイオ支部から贈呈された書籍 *Dickens at Gad's Hill* のオークションも行われ、シドニー支部会員によって



写真3



写真4

競り落とされた。次いで、連日の余興のトリとして、ディケンズの玄孫で俳優のジェラルド・ディケンズ氏が登場した。氏は少女とディケンズの列車内での出会いを表現した“A ‘Child’s Journey with Dickens’”をエネルギーギッシュに演じられた(写真3)。

25日の大学宿舎での朝食をもって学会は一通り終了したが、私を含む多くの出席者がバルモラル城へのオプション・アウトイングに参加した。時折雨に降られたものの、美しい城内と広い庭園の散策を楽しんだ(写真4)。続いて、アバディーン中心部のイタリアン・レストラン(Rustico)でのシュリッケ先生主催の夕食会で舌鼓を打った。そして、翌26日の朝食が、大学内に宿泊していたほとんどの学会参加者にとって別れの時となり、再会を約束し合った。このときシュリッケ先生は、キルト姿ではない普段の恰好に戻られていた。そのお姿が国際学会という祝祭の終わりと、日常生活の復活を象徴しているようだった。

以下、学会前の数日間を過ごしたエジンバラで、私が拾った小ネタを披露したい。エジンバラのオールド・タウン育ちのストーリー・テラー、ジョン・フィー氏の著書 *Edinburgh Old Town: Journey and Evocations* (Edinburgh: Luath, 2014) の中に、“Dickens in the Cannongate” という章があり、ミス・ハヴィシャムとスクルージ誕生にまつわるエジンバラ的見解が記されている。キャノンゲート教会近くの聖ジョン・ストリートに、エリザベス・チャータリスという美貌のレディが住んでいたが、婚約者が結婚式当日に現れなかったために、彼女は意気消沈し、その26年後に亡くなるまで屋敷から一歩も外に出なかったという。エジンバラを3度訪れているディケンズが、このゴシップを耳にしてミス・ハヴィシャムの

モデルにした可能性は十分にあると、フィー氏は主張している。スクルージに関してフィー氏が記しているのは、キャノンゲート教会の墓地を散策していたディケンズが、“Ebenezer Scroggi, Mealman”と刻まれた墓石に目を留め、“Mealman”を“Meanman”と読み間違えたという話である。これがスクルージの誕生秘話なのかどうか、その真相やいかに。